

白花の朝顔

泉鏡花作

—

「あんだ、居やりますか。」

「 唄にもあるーおもしろいのは二十を越

えて、二十二のころ三のころーあいにく此の篇の

著者に、経験が、いや端的に體驗といはう、 體

験がないから、そのおもしろいのは、女か、男か。

勿論誰に聞かしても、この唄は、女性の心氣に相違

ないらしいが、そんなのを對手にし人情のあらはし

方だか、男勝手には一寸きめ憎い。たゞし何う割引

をした處で、二十三は女盛り 近ごろでは一

層娘盛りといつて可い。然も著者なかま、私の友だ

ち、境辻三によつて話された、この年ごろの女とい

ふのは、祇園の名妓ださうである。

名妓？ いかなるものぞ、と問はれると、淺學不

通、その上に、然るべき御祝儀を並べたことにな

い私には、新橋、柳橋 いくにも、これとい
つて容式をお目に掛ける知己がない。遠いが花の香
と諺にもいふ、東京の山の手で、祇園の面影を寫す
のであるからい名妓は、名妓として、差支へないで
あらう。

また、何かゆゑに、淺學不通まで打ちまけて、こ
んな前書をするかといへば、實はその京言葉である。
すなはち、讀みはじめに記した 「あなた、ゐやは
りますか。」 「ー は、どう聞いても、紙園の藝
妓、二十二、三の、すらりと婀娜な別嬪のやうぢや
あない。おのぼりさんが出會した旅宿萬年屋でござ
る。女中か、精々で ー いまはあるか、何うか
知らぬ、二軒茶屋で豆府を切る姉さんぐらゐにしか
聞えない。嫋音、嬌聲、眞ならず。境辻三 巡
禮が途に惑つたやうな名の男の口から、直接に聞い
た時でさへ、例の鶯の初音などとは沙汰の限りであ
るから、私が眞似ると木菟に化ける。第一 「あん
た、居やはりりますか。」 さて、思ふに、「あの、
居なはるか。」

とおとづれたのだから、それさへ的確ではないのだ
さうであるから、構はず、關東の地聲でもつて遣つ
ける。

谷の戸ではない、格子戸を開けたときの、前記の
聲が「こんちは、あの 居らつしやいますか。」
と、雑とかはるのであることを、諸賢に御領承を
願つて置いて

辻三が此の聲を聞いたのは、麴町一番町も土手
下り、濕けた崖下の窪地の寒々とした處であつた。
三月のはじめ、永い日も、午から雨もよひの、曇り
空で、長屋建の平屋には、しかも夕暮が軒に近い。
窓下の襖際で膳の上の銚子もなしに――もう時
節で、鹽のふいた鮭の切身を、鱧の肌の白さにはか
なみつゝ、辻三が

といふものは、ついその三四日以前まで、ふとし
た事から、天狗に攫はれた小坊主同然、しかし丈高
く、面赤き山伏といふ處を、色白にして眉の優しい、
役者の或女形に誘はれて、京へ飛んだ。初のぼりだ

のに、宇治も瀬田も聞いたばかり。三十三間堂、金閣寺、兩本願寺の屋根も見ず知らず、五條、三條も分らずに、凡そ六日ばかりの間といふもの、鴨川の花の廓に、酒の名も、菊、櫻。白鶴、富久娘の膏を湛へた、友染の袖の池に、錦の帯の八橋を、轉げた上で泳ぐが如き、大それた溺れよう。肝魂も泥龜が、眞鯉緋鯉と雑魚寢とを知つて、京女の肌を視て歸つて、ぼんやりとして、まだその夢の覺めない折から。

無理もない、冷飯に添へた鹽鮭をはかなむのは。

時に、膳の上に、もう一品、惣菜の豆の

煮た奴。女難にだけは安心な男にも、不

思議に女房は實意があるから、これは其處らの、あやし氣な煮豆屋が、あんぺらの煮出しを使つた惡甘いのではない。砂糖を奢つて、とろりと煮込んで、せつせと煽いで、つやみを見せた深切な處を、酔覺の舌の尖に甘く染まして、壁にうつる影法師も冷たさうに縮んだ處へ。

ころ／＼と格子が開いた。取次の女中へ何かいふ、

淺間^{あさま}な住居^{すまひ}で、手^てに取る^とやうな、その「あなたは
ん、居^ゐやはりますか。」譯^{やく}して、「こんにちは、
あの、居^ゐらつしやいますか。」のそれだつたのだ
さうである。

「京の祇園と、番町の土手下ー いや、もう些
とー 半道ばかり近いのです。大勢の中で、其
の藝妓ー お絹といふんですー 其の女が、
京都驛まで、九時何十分かの急行を、見送りに来て
くれたんだから。それにしても少々遠過
ぎますね。ー 聲を聞いて、すぐそのお絹だ、
と思つたのは。」

しかし事實なんです。

(やあ、これは珍客。)

とか、大きな聲して、いきなり、箸をおくと、件
の煮豆を一つ、膳の上へ轉がしながら、いきなり立
上つて中縁のやうな板敷へ出ましたから。

鴨が南天燭の實、山雀が胡桃ですか、一層鶯が梅
の蕾をこぼしたのなら知らない事ー 草稿持込
で食つて居る人間が煮豆を轉がす様子では、色戀の
沙汰ではありません。ー それなのに

境辻三は、串戯ではなささうに、眞顔になつてい

つたのであるー

「しかし、又あらためて、お絹のその麗しさといふものは。 (お危うございます、こゝは

暗いんでございますから。) おいそれものの女中めが、のつけのその京言葉と、朱鷺色の手絡、艶々した圓鬘、藤紫に薄鼠のかゝつた小袖の褙へ、青柳をしつとりと、色の蝶が緑を透いて、抜けて、ひら／＼と胸へ肩へ、舞立つたやうな飛模様を、すらりと着こなした、長襦袢は緋に總染の小櫻で、ちら／＼と土間へ来た容子を一目、京都から歸つたばかりの主人が旅さきの知己、的切落けるものと合點して、有無を部屋へ聞かないさきから、すぐかうお通りはいゝのですが、口上が癢ですよ。 (眞暗ですか

ら。) が、仕方がない、押付け仕事の安普請で、間取りに無理がありますから、玄關の次が暗いのです。いきなり手を曳いて連れ込んだ、そのひき方が、そゝつかし屋で荒いので、私と齧を會はせた時は、よろけ加減で、お絹の顔が、ほんのりとなつて、その長篠袢のしなやかな裳をこぼれた姿は、脊は高し、天井の黒い雲から絲櫻がすら／＼と枝垂れたやうで、いや、どうも

祇園の空から降つて来たか

と思はれました。

ー ー 時に、重ねていふやうですが、三月のはじめです。三月といへば彌生です。櫻は季節でありますけれども、まだ何處にも咲いては居ません。處が、どうした事が、これから、宵、夜、夜中に掛けて、話を運びます、春木町の、其の頃の本郷座。上野の山内、清水の観音堂。鷺谷といふ順に、その到る處、花が咲いて居たやうに思ひます。唯今も、目に見えて、櫻に包まれるやうですが、實は、こんな事は、今まで、誰にも片端も饒舌つたことはありませんから、いつも一人で、咲満ちた花の中にゐた氣だつたのですけれども、あなたに。」

著者に、いふのである。

「三月、と口にしますと同時に、ふと氣がつくと、彼岸ずっと前で、まだ櫻は咲きません。が、それからお絹を連れて行きました、本郷座の芝居が、丁ど祇園の夜櫻、舞臺一面の處へぶつかりましたし、續いて上野でも、鷺谷でも、特に觀世音の御堂では、この妓と、花片が颯と微酔の頬に當るやうに、淡い

薫さへして、近々と、膝を突合はせたやうな事がありましたから、色の刺激で、欄干近い、枝も梢も、ほの紅かつたのだらうと思はれます。

處で——芝居行です。が、どの道、絲錦の帯で押立よく、羽織はなしに居ずまひも端正としたのを、仕事場の机のわきへ据ゑた處で、おなじ年ごろの家内が、糠味噌いぢりの、襷をはづして、澁茶を振舞つて見た處で、近所の鮓を取つた處で、てんぷら蕎麥にした處で、ぴん長鮪の魚軒如きで一銚子といった處で、京から降つて来た別嬪の攝待らしくはありません。京では、瓢亭だの、西石垣のちもとだのと、この妓が案内をしてくれたのに對しても、山谷、濱町、然るべき料理屋へ、晩のご飯といふ懷中はその時分なし、今もなし、は、は、は、は、笑つたつて、ごまかせない。

(おつれは?)

たゞ一人で訪ねて来て、目の前に斜に坐つてゐる極彩色に、連を聞いたも變ですが、が稼業ですから。

なぞといつて、まじくなひなから、とつ

寝る、起きる、飲む、唄ふ。十一時ごろに芝居のは
ねるのを宵の口にして、あけ方の三時四時まで續く
んでせう。雑魚寝の女護の島で、宿酔の海豹が恍惚
と薄目を開けると、友染を着た鴟のやうな舞子が二
三羽ひら／＼と舞込んで、眉を撫でる、鼻を掴む、
花簪で頭髮を搔く、と、ふわりと胸へ乗つて、搔卷
の天鵝絨の襟へ、笹色の唇を持つて行くのがある。

・いゝえ、その道之助のですよ。女形の。

然も同じ衾の左右には、まくれたり、はだ
かつたり、白い肌が濡れた羽衣に包まれたやうに成
つて、紅の閨の寢息が、すや／＼と、春風の小枕に
小波を寄せてゐる。私はたゞ屏風の巖に、一介の榮
螺の如く、孤影煢然として獨り蓋を堅くしてゐた。
とに角です、晝夜とも、その連中に、未だ嘗て、顔
を見せなかつたのが、お絹なんです。

―― 晩には、東京へ歸らうとする朝でした。旅
馴れないので、何となく心が急きます。早めに起き
た右の榮螺が、そつと蓋をあけて、恐る／＼朝日に
映る寢亂れた浮世繪を覗きながら、二階を下りて、
廊下を用たしに行く途中、一段高く、下へ氷は流れ

ませんが、植込の冷い中に、さら／＼と算の音がして、橋づくりに渡りを架けた處があつた。

そこに、女中

いや、中でも容色よしの仲居にも、つひぞ見掛けたことのないのが、むざむざな束髪で、襟脚がくつきり白い。大島緋に縞縮緬の羽織を着たのが、兩袖を胸に合せ、橋際の柱に凭れて、後姿で寂しさうに立つてゐる。横顔をちらりと視て通る時、東山の方から松風が吹込んだやうに思ひました。――これが、お絹だつたのです。

あとで聞くと、病氣で休んでゐて、それまでの座敷へは出なかつた。髪を洗つたのも漸と昨日で、珍らしい東の客が、今日歸る、と聞いたので、急いで来たが、まだ皆夜中らしいから、遠慮をしてゐたのだといふのが分りました。けれども、顔を洗つて、戻ると、まだおなじところにおなじ姿を見ると、一寸二間ばかりの橋が、急にすら／＼と長く伸びて、宇治か、瀬田か、昔話の長橋の真中に唯一人怪しい婦が、霞んにイダやうですから、氣をはつきりと、

欄干を傳ふところを、

(目々、覺めてどすか。)

と清しい目で、一寸見迎へて、莞爾したではあり
ませんか。私は冷りとしました。第一、目々が覺め
たといふ柄ぢやない、洗つて來い、といふ面です。

閑靜だから、此方へ――といつて、然も待設
けてでもゐたやうに、疏水ですか、あの川が窓
下をすぐに通る、離座敷へ案内をすると、蒲團を敷
かせる。乗つたんですが、何だか手玉に取られた形
で、腰が浮くと、矢の流れで危いくらゐる。が、きつ
ぱりと目の覺めた處で、お手づから、朝茶を下さる。

(姉さんは、娘はんですか、此樓の――)

いやな野郎で、聞覚えの京言葉を、茶の子でなし
に嚙りましたが、娘か、と思つたほど、人がらが勝
つてゐる。

通力自在、膳も盃洗もすぐ出る處へ、路之助が、
きちんと着換へて入つて來て、鍋のものも、名物の

生湯葉澤山に、例の水菜、はんぺんのあつさりした
水煮で、人まぜもせず、お絹が――お酌。

(ずつと見物をおしやしたか。)

宇治は、嵯峨は。――いや、いや、南禪寺か
ら將軍塚を山づたひに、兒ヶ淵を抜けて、音羽山清
水へ、お参りをしたばかりだ、といふと、まるで、
御詠歌はんどすな、ほ、ほ、ほ、と笑ふ。

路之助が、

(その癖、お絹さん、お前さんの好きさうな處ば
かりだぜ。境さん――この人は、まだ
休んでゐて隙ですから、其處いら、御案内をしよう
といふのですが、どうかすると、神社佛閣、同行二
人の形に成りかねませんよ。)

(巡禮結構。同行二人なら野宿でもかまひませ

ん。)

(ほ、ほ、ほ、よういはんわ。)

「御免下さい。だから言はないことではない。
もうこの邊の、語義の活法が覺束ない。」

が、串戯ではありません、容色、風采この人に向
つて、つい（巡禮結構）といった下に、思はず胸の
せまることがあつたのです。――

ですから、嵯峨へ、宇治へといふのを斷つて、朝
出ると、すぐ三十三間堂。社まうで、寺まあり。何
にしる食つたものさへ、水菜と湯葉です。あの、鍋
からさら／＼と立つた湯氣も、如月の水を渡る朝風
が誘つたので、霜が靡いたやうに見えた、精進腹、
清淨なものでせう。北野のお宮。壬生の地藏。尊か
つたり、寂しかったり。途中は新地の赤い格子、青
い暖簾、何處かの盛場の店飾も、活動寫眞の看板も、
よくは見ません。菜畠に近い場末の辻の日溜りに、
柳の下で、鮎を賣る桶を二人で覗いて、

（みんな、目あいてるやはるな。）

といった、お絹の目が鯉の目より濡々としたのが
記憶にある といった見物で。―― 歸

途は、薄暮を、もみぢより、花より、たゞ落葉を鴨
川へ渡したやうな ー 團栗橋 ー といふの
を渡つて、もう一度清水へ上つたのです。まだ電
燈にはならない時分、廻廊の燈籠の白い達筆の聯な

つたやうな薄あかりで、舞臺に立つた、二人の影法師も霞んで高い。

暗い磴の幽な底に、音羽の瀧の音を聞いた時は、

松風に音羽の瀧の清水を

むすぶ心やすゞしかるらん

地唄の三味線は、耳に消えて、御詠歌の聲をさながらに聞きますと――はてな、何故か今朝、起きぬけに、祇園の茶屋の橋がかりで笈の音のした時と、お絹の姿も同じやうで、一日を夢に見たやうに思ひましたか――

――更に、日もおかず、お絹か土手番町へ訪ねて来た、しかもその夜、上野の清水の御堂の舞臺に、おなじやうに、二人で立つ事になつたんです――

音羽のその時は、風情がいゝから、もう一度、團栗橋を渡り返した、京洛中と東山にはさまつて、何だか、私どもは小さな人形同然、笹舟ぢやあない、

木の實のくりぬきに乗つて、流れついた気がしま
すー

然うですよ、宿は西石垣のなにがし屋に取つてあ
つたのですが、宿では驚いて居たでせう。路之助の
馳走になりつゞけで、おのぼりの身は藻抜の鼓で、
座敷に預けたのが、擬更紗の旗袋唯た一つ。

しはす、晦の雪の夜に、情の宿を參らせた、貧家
の衾の筵の中に、旅憎が小判になつて居たのぢやな
い。魔法妖術をつかふか知らん、お客が蝦蟆に變じ
た形で、ひよこんと床間に乗つてゐる。

お絹が引添つての、心づけでは、電話で、もう路
之助から、こゝの勘定は済んでゐる。まだ、それよ
りも、お恥かしいやら、をかしいのは。

（ーお絹さん、その手提袋ですがね、中味が緊
張してをりません、張合のないせぬか、紐が自から、
だらりとして、下駄のさきとすれ／＼に袋が伸びて
ゐたさうで。京都へ着いた時迎ひに来てくれました、

路之助の番頭と一所だつた年増の藝妓が、追つて酒宴の時、意見をしてくれましたよ。あれは見つともない、先陣の源太はんやないけど、腹帯が弛んだやうに見える　　といつてね。）

（ほんに、私も、東の方鬘貞どす　　しつかりとあんじように　　）

――細い指であやつつて、あ、着換を畳まう、といふ、待遇振。ですが、何にもない。着のみ、着のまゝで、しやんと結ばると袋はぺしやんこ。其奴を袖で抱いて、さ、晩のご飯を近所のちもとへ、と立たれたのには、懐中もぺしやんこです。

これも路之助の心づけで、ちやんと席を取つて支度が出来てゐて、さしむかひで、酒になつた處へ、芝居から使の番頭、姓氏あり。津山彦兵衛と一寸お覚え下さい。

（――すぐ、あとで、本郷座の前茶屋へ顔を
出しますから　　――）

花柳界の總見で、樂屋は混雜の最中、おいでを願

つては却つて失禮。お送りをいたすはずですが、丁
ど舞臺になりまますから。 縞の羽織、前垂
掛だが、折目正しい口上で、土産に京人形の綺麗な
島田と、木菟の茶羽の練もの 大鬘肩の鳥
で望んだのですが、この時は少々撥つたかつた。や
がて、その京人形に、停車場まで送られて、木菟が。
夜汽車で飛ぶ。

「入らつしやいまし、ようこそ。――路之助も一度お伺ひ申したいと、いひいひ、歸京早々稽古にかゝつて、すぐに、開けたものでございますから、つい失禮を。今日はまた何うも難有う存じます。」

「御挨拶で恐縮ですよ。津山さん。私こそ、京都で、あんなにお世話になつて。――すぐにもお禮かた／＼お訪ね申さなければならなかつたのが、ご存じの、貧乏稼ぎにかまけてね。」

「なぞとおつしやる。は、は、は。」
 「と笑ひを手で蓋して、軽く咳した小肥りにがつしりした年配が、稼業で人をそらさない。」

「眞個ですよ。ところでですね。ぶちまけた話ですが、萬事、些とでも、樂屋の方で御心配を下さないやうに――實は賣場で切符を買つてと思ひましたかね。」

「そんな水臭いことを　ご串戯で。」

「いや、ご馳走は、ご馳走。見物は見物です。實は、この京人形」

お絹が上品な圓鬘で、紫仕立の柳褙、茶屋の蒲團に、据ゑたやうにゐるのです。

「たしか、今度の二番目の外題も、京人形」

「序幕が開いた處でございまして、お土産興行、といった心持でござんしてな。」

「そのお土産をね、津山さん、本箱の上へ飾つてある處へ でせう。不

意でせう。まるで動いて出たやうでせう。並んでゐる木蕘にも、ふら／＼と魂が入つたから、羽ばたい

て飛出したとーお大盡づきあひは馴れてゐな

さるだらうから、一つ、切符で見ようぢやありませんか、といふと、嬉しい、といつて賛成

は、まことに嬉しい。當方立處に懐中が大きく成つた。「

「は、は、は。」と蓋して、軽く笑ふ。津山の懐中の方が餘程大きい。

「木戸へ差しかゝると満員、全部曹切れ申侯だから、とに角、連中で来て、一二度知つてるので、此方に世話を掛けたんですが、つれがつれです、快よくあしらつてはくれませんでしたけれども、何分にも、ぎつしりで、席は一つもないといふんで、止むを得ず悪く思はないで下さい
まつた
く止むを得ず、茶屋から、樂屋へ聲を掛けて貰つたんですから。しかし、大人で、何より

結構。」

「お庇様で、こゝん處、ずっと賣切つてをります。いえ、お場所は出来ます。いえ、決して無理はいたしません。そのかはり、他様と人込みで、ご不承を願ふかも知れませんが、今日の處は、ほんの場の景氣をお慰みだけ、芝居は更めてお見直しを願ひたうございませうので。つきましては、いづれ樂

屋へもお供をいたしますが、そのおつれ様
その、京人形様。――は、は、は、――の
處は、何にもおつしやらず、ご内分に。――い
え、あなた様のおつれでございませうから、仔細はな
いのでございませうが、此の役者なかまと申します

ものは、何かと其のつきあひが又 煩いの
でして、 京がら藝妓はんが道之助を追駈
けて逢ひに来たわ、それ蕎麦だ などと申
すわけで、さうでもないのに、何かと物騒、は、は、
は。

兩三度、津山の笑ひは、こゝで笑ふのに豫め用意
をしたらしいほど、式の如く、例の口許をおさへて、
黙然を暗示しながら、目でおどけた。

「 は、は、は、と申すわけで。お含みを。
ー あゝ、八さん、お茶を入れかへて
然う、宜しい。何、ぼくにか、はて、忙しい。は、
は、は。いやいづれ今ほど。ー お場所が出来
ましたさうでございますから。」

膝で這つて、津山が立つのと入交つて、男衆が階
子段の口でお辭儀をして、

「では、ご見物を。」
「心得た。」

見ますとね、下の店前に、八角の大火鉢を、ぐる
りと人間の巖の如く取巻いて、大髻の相撲連中九人

ばかり、峰を聳て、谷を展いて、湯吞で煽り、片口、
井、谷川の流れるやうに飲んでゐる。何

しろ取込んで忙しさうだ、早いに限ると、外套を脱
いだ身軽です。いきなり下りると、

「へい、行つてらつしやいまし。」

帳場で女の聲がしたかしないに、

「危い！」

わつと響くのが一齊で、相撲が四五人どつと立つ
た。いづれも大ものですから、屋鳴り震動の中に、
幽に、トンと心細い音が、と見ると、お絹のその姿
が階子段の上から眞横になつて、くるくるトトトン、
袂がばつと亂れて、白い脛、いや、祇園での踊手だ
と聞く、舞で鍛へた身は軽い、さそくの睨みで前袂
を踏みぐくめた雪なす爪先が、死んだ蝶のやうに落
ちかゝつて、帯の絲錦が薬玉に翻ると、溢れた襦袢
の緋櫻の、細な鱗の如く流れるのが、さながら、凄
艶な白蛇の化身の、血に剥がれてのた打つ状して、
殆ど無意識に両手を擴げた、私の袖へ、うつくしい
首が仰向けになつて胸へ入り、櫛笄がきらりとして、
前髪よりは、眉が芬と匂ふんです。そのまゝ私の首

筋に、袖口が熱くかゝつたなり、抱き据ゑて、腰をたてにしたまで、すべて、息を吐く隙がない。息を吐く隙がありません。

土俵が壊れたやうな、相撲の總立ちに、茶屋の表も幟を黒くした群衆でせう。雪は降りかゝつて、來ませんが、お七が櫓から倒に落ちたも同然、恐らく本郷はじまつて以來、前代未聞の珍事です。

あまりの事に、寂然とする、その人立の中を、どう替草履を引掛けたか覚えてみません。夢中で、はすに木戸口へ突切りました。お絹は、それでも、帯も襟もくづさない。おくれ毛を、掛けたばかりで、櫛もきちんと挿つてみました。背負上げの結び目が、まだなま／＼と血のやうに片端垂つて、踏みしめて裾を庇つた上前の片褌が、ずる／＼と地を曳いてゐる。

抱いて通つたのか、絡れて飛んだのか、まるで現で、ぐたりと肩に凭つかゝつたまゝ、然うでせう

引息を吻と深く、木戸口で、

「あゝ、お婿はん。」

と泣くやうにいつた。生死の最中、洒落どころではないのですが、これは京都で、連中が、女形の客だといふので（お婿はん、お婿はん。）と私を、からかつたのが、つい出ました。

「わて、もう、死ぬるか思うた。」

と、目が澄んで、熟と視て、颯と顔色が蒼ざめたんです。

「あんたはんに恥を掻かせた、濟まんなあ、

生命の親え。」

「二階を下りしなに、何や暗うなつて、ふら／＼と目がまうて、まあ、私、ほんに、あの

中へ落ちた事なら手足が断れる。」

といふ聲も、小刻みで東へ廻る。茶屋の男は木戸口に待つてゐたが、この上極りを悪がらせまい用心で、見舞もいはない、知らん顔でぞろ／＼

ついて来た表口の人だからを、たツつけを穿いた男が二人、手を擧げて留めてゐるのが見えました。

そつと屈んで、

「へい、此方へ。」

土間、棧敷、二、三階、ぎつしり一杯。成程、漸と都合がついたのだと見えて、四人詰めに、上下大島づくめなのと、背廣の服のと、然るべき紳士が二人ゐましたが、此が、そのまゝ、腰に瓢箪でもつけてゐさうな、暖餘も、景氣燈も、お花見氣分、紅い靄が場内一面。舞臺は、切組、描割で引包んだ祇園の景色。で、この間、枝ぶりを見て返つたばかりの名木の車輪楼が、影の映るまで満開です。をかしい事には、藝妓、舞妓、幫間まじり、きらびやかな取巻きで、洋服の紳士が、櫻を一枝。あれは、あの枝は折らせまい、形容でせう。――もう一人、富豪。――成金らしい大島揃か、瓢箪をさげて居る。

一つ棧敷。――東のずっと末でした。――その妙に、同じやうな先客が、ふと氣がさしたと見えて。――挨拶をした時は、ふり向きもしなかつたのが。――お絹をこの時見返つて、愕然とした様

子です。

ところで、何でも、その櫻の枝と、瓢箪が、帮間の手に渡るのをきつかけに、おの／＼賑やかなすて臺辭で、しも手ですか、向つて右へ入ると、満場唯祇園の櫻。

花咲かば告げ　むといひし山寺の

この合方は、あらゆる淨瑠璃、勝手次第といふ處を、離子に合はせて謠が聞える。

使は來たり馬<　に鞍、鞍馬の山のうづ櫻

「牛若の假装でも出ますかね、私は大の鼻屑です。」

「恥づべし、恥づべし。式亭三馬嘲る處

の、聾棧敷のとんちきを顯はすと、

「路之助はんが、出やはるやる。」

お絹の方が知つてゐる。たゞしこの様子では、胸

も痛めず、怪我はしない。

しやり、り、揚幕。艶麗にあらはれた、大どよみの掛聲に路之助扮した處の京の藝妓が、襟裳のあかいがやゝ露呈なばかり、髪容着つけ萬端。無論友染の緋櫻縮緬。思ひなしか、顔のこしらへまで、――傍にならんだのとそつくりなのに、鬢棧敷一驚を吃する處に、一度姿を消した舞妓が一人、小走りに駆け戻ると、花道の、七三とかいふあたりで、ひつたり出會ふ。何でもお客が大變待あぐんで機嫌が悪、急いで迎ひに、といふのです。

路之助の姉藝妓が、おゝしんど、か何かで、肩へ色氣を見せたのですが、

「えらう遅うなつて、ご苦勞え、あんな、つい其處で、いえ、あんな、むかうへ、
境は

ん。
」
おや。

「あんたも知つてやる。境はんが來やはつて、逢ひたう逢ひたうて居た處やる、それやよつて。」

と此方を視て莞爾。

――

「いや、驕んなはれ。」
と舞妓が入交つて、トンと揚幕の方から路之助の背筋を敲いた。

「お、晴がまし。」お絹が、階子段を轉げた時から、片手に持つて居た、水のやうに薄色の藤紫の肩掛を、俯向いた頬へ當てたのです。

— 舞臺、舞臺ですか

舞臺どころぢやありません。その時うしろの戸が悪く、靜かに開いたと思ふと、この、私の背中を、トンと、誰か、ぐにやりとした手で敲いたんですから。

いま、戸が開いたと思ふと同時に、可厭な氣味合の冷アい風が、すうと廊下から入つて、ちり毛もとに、ぞつと沁みたま道理こそ、十九貫と渾名を取る豫て借金があつて、抜けつ潜りつ、すつばかしてゐる — でぶ／＼した、ある、その、安待合の女房が、餡子入の大廂髪で、その頃はやつ

た消炭色紋付の羽織の衣紋を抜いたのが、目のふちに、ちか／＼と青黒い筋の疊まるまで、むら兀のした濃い白粉、あぶら切つた面で、又いと覗込んで、

「大した勢ひでございますのね。」

「一寸 出よう。」

ですもの、舞臺どころですか。――

「結構ですわ、ほんとに境さん、ご全盛で。」

「串戯だらう。」

「役者があなた、この大入に、花道で、名前の廣告をするんだもの。大したものでなくつてさ。」

と、くゝり頤を揺つて、しやくる。

「あれは洒落だよ、洒落も洒落だし、第一、この人数だ、境といふのは。」

賣店があるから、ずん／＼廊下を反れました。

「何も私一人といふんぢやあなからう。」

「うんえ、あの臺辭で、あなたの棧敷を見て笑つたのを見て、それで氣がついた、あなたの來てゐるのが。 といつたわけなんですもの、やすい祝儀ぢやでけんでねえ。」

と、何處かのなまりが時々出る。

「馬鹿を言ひたまへ、路之助は友だちだぜ。――

おかみさん、知つてるぢやないか。」

「それは存じて居りますがね、ご全盛には違ひませんね。何しろ、しがない待合を、勘定で泣かせようといふ勢ひではありませんです。」

ないが上にもないものを、ありあまつてもあるやうに。催促の術をうらがへしに、敵は搦手へ迫つて危い。

「一言もない。が、勢ひだの全盛なぞは、其方の誤解さ、お見違へだよ。」

「見違へましたよ、ほんとうに。」

と衣紋をたくして、

「大した腕だよ、見上げたあよう。」

「何が。」

「なにがぢやあないぢやないかね、といひたくなるよ。ふんとうに。
新橋柳橋それとも赤

坂
「ご同伴は。」

「一寸見掛けませんね、あのくらゐなのは。」

商賣からお恥かしいんだけれど

三千歳

おいらんを素人づくりに　おつと。」

と兩袖を突張つて肩でおどけた。これが、さかり場の魔所のやうな、廂合から暗夜が覗いて、植込の影のさす姿見の前なんですが。

「藝妓にしたといふ素敵な玉だわ

あん

なのが一人、里にあれば、里の譽れ、まあさね、私のうちへ出入りをすれば、私の内の名聞ですよ。

境さん、貸借も、もとは味方、勘定は勘

定、ものは相談、あなたとはお馴染ぢやありませんか。似合つたよ、恐れ入つたよ、ものになつてる、

容子がね。うんねさ、だからさ、一度連込んでおいでなさいよ。早い話が　今夜、これから歸

りにさ。水打つた格子さきへ、あの紫が裳をばかして、すり硝子の燈に、頸あしをくつきりと浮かして、ごらんなさい、それだけで、私のうちの佑券がグツと上りまसान。

兜町の、ばり／＼したのが三四人、今も見物ですすがね。すぐ切上げてもらひます。一寸一座敷、抜け荷を賣りや　すぐに三十と五十

さ、あなた。あなたの遊興は、うはになるわ。も

う一息、目を眠つて、――直さん
「

（――直さんの意味詳ならず。談者、境氏に
聞かんとして、いまだ果さざる處である――）

#####

「ね、色悪で、あの白々とした甘い膚を貸すとな
りや、十倍だわ。三百、五百、借金も出て出るぢや
あないかねえ。」

酒と、女が、目にも口にも借りのある、聾棧敷の
とんちきも、むら／＼として、我ながら姿見に色が
動いた。

「何をいつてるんだ――同伴はないよ。」

「あら。」

「誰も居やしない。」

「まあ。」

「私一人ぢやあないか。」

「おや／＼おや。」

「何を見たんだ。」

「ふん、しら／＼しい、空ツとぼけもいゝ加減になさい。あなたがさういふ了簡なら、いゝから私は居催促をするから、こゝへ坐つ了ひますから、よござんすか。」

これこの十九貫、廊下へ、どすんと坐りかねない。

「仕方がない、ぢやあ、眞個の事をいはう。」

「いはないでさ。そして、一寸顔を貸しますか、

それとも膚を

「顔にも、膚にも それは煙だ。」

「又かね、居催促ですよ、坐りますから。」

「あれは霞だ、霧なんだよ。」

「煙草のかねえ。」

「いや藝妓の 幽霊だ。」

「えゝ。」

「この大人に、けちでもつけるやうで可厭だから、いひたくはなかつたんだが、どうも然うまでいはれりや爲方がない。三千歳を素人とか、何とかいつたね、それだ、そつくりだ。そりや路之助に憑絡つて

る幽霊だ。いゝえ、憑ものは、當人の背中に負さつて居るとは限らない。――

實は祇園の藝妓だがね、私が此の間、彼地へ行つて居たもんだから、路之助が歸るのに先廻りをして、私を便つて來たらしい。又かと思ふ。今

いはれた時も慄然としてこの通り毛穴が立つてら。

私には何にも見えないんだよ。見えないが、一人で茶屋へ休むと、茶二つ、旅籠屋では膳が二つ、といふのが、むかしからの津々浦々の仕來りでね、――

席には洋服と、男ばかり三人きりさ。それが、お前さんに見えたのは、幽霊に違ひない。――

「ひえゝ。」

しめた。不斷の大臆病。

「行つて見たまへ、覗いてごらん、さあ。それが嘘なら、吃と彼處にゐやしない。ゐても、目には見えないから。」

「氣味の悪い いやだねえ。」

「板一枚のなかは、蒸し上げるばかりのこの人數だ。幽霊だつて何うするものか。行つて覗いて見たまへ、

といふのに。」

恰も其處へ、魔の手が立樹を動かすやうに、のさ／＼と相撲の群が歸つて来た。

「それ、力士連が来た、なほ氣丈夫ぢやあないか。」

と、圖に乗つていつた。が、この巨大なる驅は、威すものにも陰氣を浴せた。それら天井を貫く影は、すつくと電燈を黒く蔽つて、廊下にむら／＼と影が並んで、姿見に、かさなり映つた。

「こゝへ来た、幽霊が。」

「ひやあ。」

「あ、力士の中に藝妓が居る。」

「きやつ、あれえ、お關取。助けてえ。」

「やあ、何ぢやい。」

縋りつかれた關取がたじろいで、

「どえらい頭ぢやい。棧俵法師い。」

「お絹さん。ー お絹さん。一寸。」

「戸を開けて、立ちながら密と呼ぶと、お絹は、金煙管に持添へた、女持ちの嵯峨錦の筒を襟下に挟

んで、すつと立たつた。

前まへ髪がみに顔かほを寄よせ、

「何なんだか落おち着つきません、一度いちど、茶屋ちややへ引ひ揚きあげよ

う。
」

四

その夜も　ー　やがて十一時　ー　清水の石
 段は、ほの白く、柳を縫つて、中空に高く仰がる。
 御堂は薄墨の雪の中に、朱の柱を聯ね、丹の扉を合
 せ、青蓮の釘かくしを装つて、棟もろとも、雪の被
 衣に包まれた一座の寶塔のやうに淨く厳しく聳えて
 見ゆる。

「東口を上と、薄く手水鉢に明りのさしたのは、
 斜に光を放つた舞臺正面に唯一つ掲げた電燈で、樹
 にも土にも、靈境を照らす光明は此の一燈ばかりな
 のが、却つて佛燭の靈を表して、龍燈
 いつては少し冥い。然矣、明星の天降つて、梁を輝
 かしつゝ、丹碧青藍相彩る、格子に、縁に、床に、
 高欄に、天井一部の莊嚴を映すらしい。

見られよ、されば、全舞臺に、蟲一つ、塵も置か
 ず、世の創の生物に似た鰐口も、その明星に影を重
 ねて、一顆の大碧玉を鏤めたやうなのが、棟裏に凝
 つて紫の色を籠め、扉に漲つて朧なる霞を描き、舞

臺に鬘鬘き、縁を廻つて、井欄に數ふる擬寶珠を、
ほんのりと、さながら夜櫻の花の影に包んでゐる。

その霞より、なほ濃かに、靄に一面の胡粉を刷いで、
墨と、朱と、藍と、紺青と、はた金色の幻を、
露に研いて光を沈めた、幾面の、額の文字と、額の
繪と、繪馬の數と、その中から抜き出たのではない、
京人形と、木菟は、道芝の中から生れて出たやうに
上つたが。――

「車夫、此處だ、此處でおろして。待つてて

貰はう。」

俵を二臺、東の石段で下りたのです。

「逆縁ながら、といつては間違ひかね、手を曳いて
あげようか。芝居茶屋の階子段のお手際では、此
の石段は覺束ない。」

などと、木菟が生志氣にいふと、

「大事おへん、前刻落ちたら、それなり、地獄え。
上が清水様どすよつて、今度は轉んだかて成佛ど
す。」 などと京人形が口を利いた。

手水鉢で、蔽の下を、柄杓を搜りながら、雫を拂ふと、さきへ手を淨めて、紅の口に啣へつゝ待つた、手巾の眞中をお絹が貸す

勝手になさい。

が、こんなのが、初夜過ぎた靈場へ、すら／＼と參られようはずはない、東の階の上には、一本ならべの軽い戸だが、柵のやうに閉ざしてあつた。

「前は、かうではなかつたはずです

不

良でも入るか知らん。」

「此方も不良どすな、おほ、ほ。」

「怪しからん、ー 向う側へ。」

と、あとへ退つて、南面に、不忍の池を眞向ひに、高欄の縁下に添つて通ると、欄干の高さに、お堂の光明が遠くなり、樹の根、岩角と思ふまで、足許が辿々しい。

さ、さ、とお絹の褌捌きが床を抜ける冷たい夜風に聞えるまで、闐然として、袖に褌に散る人膚の花の香に、穴のやうな眞暗闇から、いかめの鬼が出は

しまいかー私わたしは胸むねを緊しめたのです。

「まづ、可よし。」

西側にしがはの、こゝの階か段だん上うへは、戸とはあるが、片かたとざし
で開ひらいてゐた。

廻廊くわいらうの上うへを見れば、雪空ゆきぞらでもあるやうに、夜目よめ
に、額がくと額がくとほの暗くらく續ついた中に、一處ひとところ、雪くもを開ひらい
て、千手救世音せんじゆくわんぜおんの金色こんじきもじの文字もじが髻はうぶつとして、二十六
夜やの月光げつくわうの如ごとく拝はいされる。

欄干らんかんに枝えだをのべて、名樹めいじゆの櫻さくらがあるのです。そ
の梢しんがえ、この額がくと相対あひたいして、たとへば雪ゆきと花はなの縁えんを、
右みぎへ取り、舞臺ぶたいの正面しやうめんその明星みやうじやうと、大碧玉だいへきぎよくの照てる處ところ、
京人形きやうにんぎやうと木菟みづとが、玩弄品おもちゃの轉まわつたやうになつて拜をがん
だあとで、床ゆかの霞かすみに裊つまを輕かるく、衝つと出でて、裏紫うらむらさの欄らん
干かんに、すらりと立たつた、お絹きぬの姿すがたはーー###
#####

この時とき、幹みきの黒くろい松まつの葉はも、薄靄うすもやに睫毛まつげを描えがいた
風情ふぜいして、遠目とほめの森もり、近ちかい樹立こだち、枝えだも葉はも、櫻さくらのほ
かは、皆柳みなやなぎに見みえた。

「あゝ、綺麗だ。お絹さん　ー　向ひ合つた不
忍の御堂から、天女が吃と覗いておいでだ。」

「おゝ晴がまし、勿體ないえ。」

と、吃驚したやうに、半ばその美しさを思つてゐ
て、羞ぢたやうに、舞臺を小走りに西口の縁へ遁げ
た。遁げつゝ薄紫の肩掛で、鬘も髻も蔽ひながら、
曲る突當りの、欄干の交叉する擬寶珠に立つ。

踊の鍊で、身のこなしがはずんだらしい、その行
く時、一筋の風がひら／＼と裾を巻いて、板敷を花
片の軽い渦が舞つて通つた。

袖摺れるほどなれば、櫻の枝も、墨繪のなかに蓄
を含んで薄紅い。

「そこから見えますせ、秋色櫻」

「暗うて、よう見えへんけど　先度晝來てをそ

はつた事があるよつて、何うやらな、底の方の水も
せん／＼と聞えるのえ。」

「音羽の瀧が響くんでせうが、秋色は見えないは

ずだ。そこに立つて居るんだから。」

「またなぶらはる 發句も知らん、地唄の

秋色はんで、どないしよ。」

と、振返ると、顔をかくしたまゝの羅の紫を、眉
が透き、鼻筋が白く通つて、優睨みで凜とした。

花咲かば告げむと いひし山寺の

使は來たり、馬に 鞍

くらまの山のうず 櫻

ふと、前刻の花道を思ひ出して、何處で覺えたか、
魔除けの呪のやうに、故と素よみの口の裡で、一
歩、二歩、擬寶珠へ寄つた處は、あひては何うやら
鞍馬の山の御曹子。 それよりも楠氏の姫

が、田舎武士をなぶるらしい。 ー 大森彦七

ー 傍へ寄ると、 ー 便なういかゞや ー

と莞爾して、直ぐふわりと肩にかゝりさうで、不
気味な中にも背がほてつた。

「やあ、洒落れてるなあ。」

「―― そのころは、上野の山で、夜中まだ取締りはなかつたらしい。それでも、板屋漏る燈のやうに、細く灯して、薄く白い煙を靡かした、おでんの屋臺に、車夫が二人、丸太を突込んだやうに、眞黒に入つて居たので。」

「羨しいやうですね」

串戯ぢやない、道理こ

そ。―― 来てごらんなさい、此方の、西側へ俵を廻はしたのが、石段下に、變に遙な谷底で、熊が寝て居るやうですから。」

「動物園かてあるいふよつて、密と出て來やはり

しめえんか、おそろしな。」

と、欄干ぞひに、姫ぎみ、お寄りなされたが、さして可恐くはなささうで。」

「ほんに、谷底のやうで霽が深うおすな、前刻の階子段思出したら、目がくら／＼とするやうえ。」

白い片掌を田舎武士の背にあてて、

「あの俵がひとりでに、石段を、くる／＼まひまうて上つて來たら、どないしよ、
火の車
になつておそろしかるな。」

「お絹さん、そんなことをいふもんぢやあない。
歸途に怪我でもあると不可い。」

「それでも、あの段、くる／＼舞うてころげた時は、あて、ばツと帯紐とけて、裸身で落ちるやうにあつて、土間は血の池、おにが澤山あはつて、大火鉢に火が燃えた。」

手を觸れてみて、肌をいふ。大森彦七は胸が唸つた。魔を退けうと太刀の柄 洋杖をカンとついで、

「そんなことをいふから、それ、宙に火が燃えて来た、迎ひに来た、それ。」

「あゝれ。」

闇を縫つて、くる／＼と巻いて来る、火の一點あり。事實、空間に大きく燃えたが、雨落到近 づいたのは、巻蓆で、半被股引眞黒な車夫が、鼻息を荒く、おでんの盛込を一皿、銚子を二本に硝子盃を添へた、赤塗の兀盆を突上げ加減に欄干越。兩手で差上げたから巻蓆を口に預けたので、煙が鼻に沁む顰

め面めづで、ニヤリと笑わらつて、

「へい、わざつとお初穂はつほ

若奥様わかおくさま。」

「馬鹿ばかな。」

「一寸ちよつと、手をお貸かしなすつて。」

「馬鹿ばかな、お初穂はつほもないもんだ。いゝ加減かげんおみつ
てるぢやないか。」

「へゝゝ、煮加減にえかげんの宜よろい處ところと、お爛かんをみて、取とりの
けて置おきましたんで、へい、たしかに、其その清きよらか
な。」

「馬鹿ばかな、おなじ人間にんげんだぜ、くひものは、つつく
るみだ。そんな事ことはかまはないが、大丈夫だいぢやうぶかい、あ
とで、俵くろまは？」

「自動車じでつしやの運轉手うんでんしゆとは違ちがひます、えへゝ。駕籠かご昇かき
と、車夫くるまやは、建場たてばで飲のむのは仕來しきたりでさ。ご心配しんぱいな
さらねえで、ご緩ゆつとり。若奥様わかおくさまに、多分たぶんにお心付こころつけを頂いた
きました。ご冥加みやうがでして、へい、何どうぞ、お初穂はつほを

「お絹きぬが柔順すなほに、もの軟やはらかに取上とりあげた、おで
んの盆ぼんを、何どういふものか、もう一度彦七いちどひこしちが故わざとや
けに引取ひきとつて、「飛とんだお供物くもつ、狒ひ々にしやがる。」

若奥様は聞いただけでも、禿祠で犠牲を取つたやうだ。
黒門洞播鉢大夜又とでもいふかな

あ。ゝ
縁に差置いた湯氣の立つおでんの盆は、地圖に表
示した温泉の形がある。

椎の葉にもる風流は解しても、鰯のぬたでないばかり、此の雲助の懐石には、恐れて遁げさうな姫ごみが、何と、おでんの湯氣に向つて、中腰に膝を寄せた。寄せた其の片褸が、ずるりと前下りに、前刻のまゝで、小袖幕の綻びから一重櫻が――芝居の花道の路之助のは、たゞこれよりも緋が燃えた

――誘ふ風にこぼるゝ風情。###

###4

――實は帯を解いて、結び直す間がなかつた、茶屋が立籠んだからなので。――あれから、直ぐに其の茶屋へ引上げて、吸物一つ、膳の上へ、辨嘗で一銚子並べたが、その座敷も、總見の控處で、持もの、預けもの澤山に、かた／＼男女の出入が續いたゆゑ、雑と夕銅を。銚子だけは手酌でかへた。今夜は一先づ引上げよう、乗ものを、と思ふ處へ、番頭津山が急いで出て、もうお俵は申し

つけました。といふ、客あつかひに馴れたもの。急所を壓へて此方からは乗出させぬ。ご都合まで、ご存分な處まで、は、は、は、と口を壓へて笑ふと、お絹が根岸の藍川館。――鶯谷へ、この人の口でいふと、町が嬉しがつて、ほう、と微笑んで鳴きさうに聞えた。寂しい處でございませぬ、境さん。――これはお送り下さらないではなりません。すまい。勿論。

京では北野へ案内のゆかりがある。切通しを通るまへに、湯島。その鳥居をと思つたが、縁日のほかの神詣、初夜すぎでは如何と聞く。

壬生の地藏に封するものは、此の道順に一寸ない。其處で、何處よりも清水だつたが、待つた、待つた。廣小路の數萬の電燈、靄の海の不知火を掻き分けるやうに、前の俵を黒門前で呼留めて。「上野を抜けると寂しいんですがね、特に鶯谷へ抜ける坂のあたり、博物館の裏手なぞは。」

「寂しいとこ行きたい、誰も居やはらんとこ大好きです。」すかし幌の裡から、白木蓮のやうな横顔なのです。

「大事ないどすやろえ、お縁の

裏の處

には、蜜柑の皮やら、南京豆の袋やら、掃き寄せてあつたよつてにな。」

「成程、舞臺傍の常茶店では、晝間はたしか、うで玉子なぞも賣るやうです。お定りの菫蕪に、雁もどき、焼豆腐と、竹韜などは、玉子より精進の部に入ります。第一これで安心して、焼草が吹かせる。灰もマッチ殻も、盆へ落すと。」

「よくない奴だ。——これは何うもお酌は恐縮重ねては、なほ恐縮、よくない奴だ。」

「巻莨と硝子盃を兩手に、二口、三口重ねると、壓へた芝居茶屋の酔を、ばつと誘つた。」

「さあ、お酌を——是非一口、かういふことは年代記ものです。」お絹も、心ばかり、ビイド口の底を、琥珀のやうに含んで、吻と呼吸したが、「あゝ、おいし茶屋ではな、ご飯かて、針を呑むやうどしたえ。ほんに、今でも、ひざのどこぶる／＼と震へるわ、菫蕪はんのやうどすな。」もう一口。

「あの、これから場所へいうて、二階の上り口へ出ましたやる。下に大きな人大勢やよつて、一寸立留まつて覗くやうにするとな、あゝ、灯が點れかけ

の暗さが来て、逢魔が時や思うたらな、路之助はんの襪が澤山、しんなり揃うた青い中から、大きな顔が出てな。」

「相撲のだね。」

「違ひます、女子はんの。」

「口をばこないにして。」

と結んだ唇を、おくれ毛が凄く切つた、黒い蝶が不意に飛んだやうに。

「可恐い顔をして睨みはつた。それがな、路之助

はんのおかみはんえ。」

「路之助？ 路之助の」

「立女形、あの花形に、蝶蜂の群衆つた中には交らないで、ひとり、束髪の水際立つた、この、かげろふの姿ばかりは、獨り寝すると思つたのに—— 請ふ、自惚にも、出過ぎるにも、聴くことを許されよ。田舎武士は、でんぐり返つて、自分が、石段を熊の上へ轉げて落ちる思がした。」

「何もな、何も知らんのえ、私路之助はんのは、

あんたはん、ようお馴染の—— 源太はん、帯が弛む—— いははつた妓どすの。それをば何やか

て、私にして疑やはつてな、疑やはるばかりやおへん、えらいこと怨みやはる。よつて、お客

はんたちに分れて、一人で寝るとなーー 藍川館

いうたら奥の奥は、鐵道線路に近うおすやる。がツがツ響がして、よう寝られん、弱つて、弱つて、とろりすると、ぐウト、緊めて、胸倉とつて、ゆすぶらはる、おかみはんどす。キヤアいうて、

恥かし 長襦袢で遁げるとな、しらがまじ

りの髪散らかいて、般若の面して、目皿にして、出刃庖丁や、撞木やないのえ。ふだん、は

いからはんやよつて、どぎついナイフで追つかける。胸かて、手かて、揉み、悶えて、苦し、苦し

て、死ぬるか思ふと目が覺める よつて、よう氣をつけて引結へ、引結へしておく伊達巻も何も、ずる／＼に解けて了うて、たら／＼冷い汗どす

ね、 前刻はな夢でなうて、なほおそろし

て、おそろして。 今度は大森彦七が踏みこたへた。

「神経だ、神経ですよ。」

「誰でも此の場は知識になる。」

「しかし、何うだか、その路之助一件は、事實な

のでせう。」

誰でも此の場は凡夫になる。

「つらいこと。」

と、斜にそむいて、

「あんたはんまで、そない言ははる、口惜いえ。」

「が、しかし、つらいでせう。」

莩を捨てて稍子盃を取つて、

「そんな時は、これに限る。熱爛をぐつと引つか

けて、その勢ひで寝るんですな。ナイフの一挺なん

ざ、太神樂だ。小手しらべの一曲さ。さあ、一つ。」

「やどへ行て。」

「成程。」

「あんたはん、のましてくりやはりますか。」

「飲ませますとも。」

「嬉しいな、段で、抱いてくれやはつた時から、

あんたはんは生命の親どす。」

眞顔で、恚うまでいはれたのには、酒が支へた。

胸の澄まない事がいくらある

「お言で痛み入る。」

と、もう一息ぐつと呷つて、

「――實は串戯だけれどもね、うつかり、人を信じて、生命の親などと思つては不可せん。人間は外面に出さないで、どういふ不了簡を持つてゐないとも限りません。」

恚ういふ私ですがね、笑ひ事ぢやあるけれども、夢で般若が追廻すどころか、口で、といふと、大層口説でもうまさうだ。然うぢやない、心で、お絹さんを

「私をえ？」

「幽霊にしましたよ。ご免なさいよ。殺した事があるんだから。」

「あんたはんがな。」

前髪がふつくり揺れて

差俯向く。

「本望どすな。」

と莞爾して、急に上げた瓜横顔が、差向ひに軽く仰向いた、眉の和やかさを見た目には、擬寶珠が花の雲に乗り、霞がほんのりと縁を包んで、欄干が遠く見えてぼうとなつた。その霞に浮いて、たゞ御堂の白い中に、未開紅なる唇が夜露を含んで咲かうとする。

「あれえ。」

聲を絞ると、擬寶珠の上に、圓鬚が空ざまに振られつゝ、

「蛇が、蛇が。」

「何、蛇が。」

「赤い蛇が。」

赤い蛇は、褸の亂れた、きみの裾のほかにあるものか。

「膝が震へて、足が縮む

動けば落ちよ

うし、どないしよう。」

と欄干に、わな／＼。

「今時蛇が、こんな處へ。」

不忍の池に

は白いのがあるといふが。」

と、故と落着いたが、足もとほうるつきながら、外套の袖で、背後状にお絹を圍つた。

「額の、額の。」

あゝ、幽に見ゆる觀世音の額の金色と、中を劃つて、霞の疊まる、横廣い一面の額の隙間から、一條たたりと下つてゐた。

「紐だ、紐ですよ。何かの。」

勇ゆうを示しめして、示しめし次ついで手に、ぐい、と引ひくと、

「あれ、白しろい顔かほ。」

聲こゑとともに、くなりと膝ひざをついたお絹きぬが、背うしろ後ごから腰こしにつかまつた。

「上うへから覗のぞかはる どうしようねえ。」

お聞ききづらからうが、さういつた意味いみで、身み震ふるひをする勢いきほひが手て傳つたつて、紐ひもに、ずる／＼と力ちからが入はいると、ざ、ざ、ざ、と摺すれて、この場ばあひ合あひ　　ー　　ごみも埃ほこりもいつては居をられぬ。額がくの裏うらから、ばさりと肘ひじに乗のつたのは、菅すげ笠がさです。鳩はとの羽はねより軽かるかつたが、驚おどろくはずみの足踏あしぶみに、ずんと響ひびいて、どろ／＼と縁えんが鳴なると、取とり絶すがつた手てを、アツと離はなして、お絹きぬは、板いたに手てをついて、眞ま俯うつ向けむになりました。

おでんの膳ぜんなぞ一ひと跨またぎに、今こんど度は私わたしの方はうが欄らん干かんへ乗のり出して、外ぐわいたう套たうを拂はらつた。かすりの羽織はおりの左ひだりの袖そでで、其その笠かさの塵ちりを拂はらつたんです。一ひと目め見みると分わかつたのです。女をんなの蒼あを白しろく見みえたのは、繪ゑの具ぐです。彩さい色しきなんです。而なうして、笠かさに描ゑがいたのは、朝あさ顔がほ

「
朝あさ
顔がほ
？」
」

こゝに寫し取る今は知らず。境の話^{さかひ はなし}を聞^きくうちはおでん爛酒^{かんざけ}にも酔^{よひ}心地^{ごこち}に、前中^{まへぢゆう}、何^{なん}となく櫻^{さくら}が咲^さいて、花^{はな}に包^つまれたやうな氣^きがしてゐたのに、桃^{もも}とも、柳^{やなぎ}ともいはず、藤^{ふぢ}、山吹^{やまぶき}、杜若^{かきつばた}でもなしに、いきなり朝顔^{あさがほ}が、しかも菅笠^{すげがさ}に、夜露^{よつゆ}に咲^さいたので、聞^きく方で、ヒヤリとした。この篇^{へん}の著者^{ちよしや}は、其處^{そこ}で、境^{さかひ}に聞^き反^{かへ}したのでいあつた。

「朝顔^{あさがほ}？」

と。

に引かゝつて、大分不景氣だつたやうですが、もと
大藏省邊に、いゝ處を勤めた、退職のお役人で、お
嬢さん育ちだから、品がよく一寸權高なくらゐ。尤
も、十八九はたちごろから、時々見た顔ですから、
男弟子に向つては、澄ましてゐたのかも知れませぬ。
薄手で寂しい、眉の凜とした瓜核顛の
佳
い標致。

申すのを忘れますまい。

さしあたり、

のちの祇園のお絹を東京にしたやうな人
だつたんです。ー いや、何うも、若氣の過失、
やがての後悔、正面あなたと向ひ合つては、慙愧の
いたりなんですが、私ばかりではありません。その
ころの血氣な徒は、素人も、堅氣、令嬢ごときは。
へん、地者、と稱へた。何だ、地ものか。

「薬でも、とろゝはあやまる。」

誰もご

馳走をしもせぬのに。たふとい處女を自然薯扱ひ。
蓼酢で松魚だ、身が買へなけりや鹽で揉んで蓼だけ
噛れ、と悪い蟲めら。川柳にも、（地女を振りも返
らぬ一盛）そいつは金子を使つたでせうが、此方は

素寒貧で志を女郎に立てて、投げられようが、振られようが、楮熊と取組む山童の勢ひですから、少々薄いのが難だけれど――すなほな髪を、文金で、打上った、妹弟子如きものは、眼中になかったのです。

お洲美さんが、大野木に縁づいたのは二十二の春――彌生ごろだつたと思ひます。その夏、土用あけの残暑の砌、朝顔に人出の盛んな頃、入谷が近いから招待されて、先生も供で、野郎連中六人ばかり、大野木の二階で、蜆汁、冷豆腐どころで朝振舞がありました。新夫人はまだ島田で、實家の父が酒飲みですから、ほどのいゝ爛がついてゐるのに、暑さに咽喉の乾いた處息つきとはいつても、生意氣な、冷酒を茶碗で煽つて、忽ちふら／＼ものになつて、あてられ氣味、頭を抱へて蒼くなつた處を、ぶしつけものと、人前の用捨はない、先生に大目玉をくらつて、上げる顔もなかつた處を、「ほんの一口とおいひなさいましたものを、私がうつかりもり過ぎて」と妹分の優しい取なし。それさへ胸先に沁みましたのに、「あちらでおやすみなさいま

し。」「 次ぎの室へ座を立たせて ー
其處が女作家の書齋でしたが。

蚊がみますわ、と團扇で拂つて、丸窓を開けて風
を通して、机の前の錦紗のを、背に敷かせ、黙つて
枕にさせてくれたのが。

今更臍肩分でいふのではありません、 ー
ちよツ、目力（助）編輯め、女の徳だ、などと蔭
で皆憤懣はしたものの、私たちより、一步さきに文
名を馳せた才媛です、その文金の高髻の時代から

平打の簪で、筆を取る。

銀杏返し、襟つきの縞八丈、黒締子の引かけ帯で、
（>たけくらべ）を書くやうな婦人も、一人ぐらゐ
欲しいとは、お思ひになりませんか、お互ひに

月夜の水にも花は咲く。
温室のドレス
で、エロのほひを散らさなければ、文章が書けな

いといふ法はない。

「話は一寸それました。が、さあ、前後しました。後一年、不_ふ断_{だん}、不_ふ沙_さ汰_たばかり、といふうちに、も、一_い一_い 大_{おほ}野_の木_き宗_{そう}匠_{しやう}は、常_{つね}袴_{はかま}の紺_{こん}足_た袋_びで、炎_{えん}天_{てん}にも日_ひ和_{より}下_げ駄_たを穿_うつ。何_な故_げといふに、男_{おとこ}は肝_{きも}より丈_{たけ}まさり、應_{おう}封_{たい}をするのにも、見_み上_あげると、見_み下_おるすのでは、見_{けん}識_{しき}が違_{ちが}ふ。

その用_{よう}意_いで、その癖_{くせ}ひよろりと脊_せが高_{たか}い。ねば／＼と優_{やさ}しい聲_{こゑ}を、舌_{した}で捏_こねて、ねツつりと齒_はをすかす、言_いのあとさきは、咽_{のど}喉_{おく}の奥_{はら}の方_{ほう}で、おんと、空_{から}咳_{げき}をせくのきつけかけに、指_{ゆび}を二_{ほん}本_{はな}鼻_{はな}の下_{した}へ當_あてるのです。これ_{こゝ}は可_を笑_かしい。が、みつくちといふんぢやありませんが、上_う唇_{はくちびる}の眞_ま中_{なか}が、一_ち寸_{よつと}齒_{はく}莖_きを覗_{のぞ}かせて反_そつてゐるのを隠_{かく}すためです。言_{げん}語_ご、容_{よう}體_{たい}、蟲_{むし}が好_すかなくつて大_{だい}嫌_{きら}ひ。尤_{もつと}もそれでなくつても、上_う野_のの山_{やま}下_{した}かけて車_{くるま}坂_{まか}を過_すぐる時_{とき}ンば、三_み島_{しま}神_{じん}社_{しゃ}を右_{みぎ}へ曲_{まが}るのが、赤_{あか}蜻_{とんぼ}蛤_{ひと}と齊_{ひと}しく本_{ほん}能_{のう}の天_{てん}使_しの翼_{つば}である。根_ね岸_{ぎし}へ入_はつては自_し然_{ぜん}に背_{そむ}く、といふ哲_{てつ}人_{じん}であつたんですから、ついで近_{ちか}間_まへも寄_よらずに居_ゐました。

郷里きやうり ー 秋田あきたから微祿びろくした織物屋おりものやの息子むすこです
が、何どう間違まちがへたか、弟子でしになりたい決心けつしんで上京じやうきやうし
て、私わたしを使たよつて、斷たつて大野木宗匠おほのきそうしやうを師しに仰あふぎたい、
素願そくわんを貰もらかして貰もらひたい、是非ぜひ、といふ頼たのみです。

頼たのまれた。

頼たのまれたものは仕方しかたがない。

しかも、なくなつた私わたしの父ちちか此この織物屋おりものやに世話せわにな
つた義理ぎりがある 先生せんせいの内意ないいも伺うかつた上うへ

もう、朝夕あさゆふは身みにしみますのに、羽織はおりは衣ころもがへの時とき
から 質しちです。

ゆかた一枚いちまい、それも織おつたんぢやありません、北ほく
國人こくじんの鎧よろひですから、ものほしさうな瓦斯織がすおりの染縞そめしまで、
安やすもの買かひの汗あせがにほふ。

こいつを、二階にかいの十疊でふの廣間ひろまに引見いんけんした大人たいじんは、
風通ふうつう小紋こもんの單衣ひとへに、白しろの肌襦袢はだじゆばん、少々せうく汚よこれ目めが黄きば
んだ 兄妹きやうだい分の新夫人しんふじん、お洲す美みさんの手てが届とか
ないやうで、悪わるいけれども、新郎しんらう、膏あぶらが多いおほとお心こゝ
得下ろえくださいまし。 ー ー 綾織あやおりの帶おびで、鹽瀨しほせ紺無地こんむぢの

袴^{はかま}。總^{ふさ}のついた、塗柄^{ぬりえ}の團扇^{うちば}を手^てまさぐる、と、こ
れが内^{うち}にゐる扮装^{ふんさつ}で、容體^{ようたい}が分^{わか}りませう。

鼻^{はな}の下^{した}へ、例^{れい}の、指^{ゆび}を立てて、「おゝん」と
飲^のみ込んでくれました。「不思議^{ふしぎ}な縁^{えん}ですね、ま
だ下^{した}極^{ぎま}りで、世間^{せけん}に發表^{はつぱう}はしないけれども、今度^{こんど}、
仙臺^{せんたい}の――一學校^{あるがっこう}の名譽^{めいよ}教授^{けうじゆ}の内命^{ないめい}を受けて、
あと二月^{ふたつき}ぐらゐで任^{にん}に赴^{おもむ}く。――ま、その事^{こと}に
なりました。丁^{ちやう}ど幸^{さい}ひ、内弟子^{うちでし}、書生^{しよせい}にして連^つれて
行^ゆかう、宜^{よろ}しくば。」も何^{なに}もない。願^{ねが}つ
たり叶^{かな}つたり、話^{はなし}は思^{おも}ふ壺^{つぼ}へはまつたのですが。

――となりの、あの、小座敷^{こざしき}で、あの、朝顔^{あさがほ}の、
あの朝^{あさ}――

手細工^{てさいく}らしい桔梗^{ききやう}の肘^{ひぢ}つきをのせて、繪入^{ゑいり}雑誌^{ざっし}を
幾冊^{いくさつ}か、重^{かさ}ねて、それを枕^{まくら}にさして、黙^{だま}つて顔^{かほ}を見
ると、ついた膝^{ひざ}をひいて立^たちしなに、「憎^{にく}らしい。」

たゞ、その雑誌^{ざっし}一冊^{さつ}ものなぞ、どれも皆^{みな}
――ろくなものではありませんが、私^{わたし}のかいた
のが入^{はい}つてゐたのを、後姿^{うしろすがた}と一所^{いっしょ}に、半^{なか}ば起^おきに、
密^{そつ}と見^みた時^{とき}、なぜか、冷酒^{ひやざけ}が氷^{こほり}になつて、目^めから、

しかも、熱いものがほろ／＼と湧きました。

時に、その人がいま出て来ません。その癖、訪れた玄關では、女中よりさきに、出迎へて、二階へ通してくれたのに、――茶を運んだのも女中です。

庭で蟋蟀の鳴くのが聞える。

「薦の葉の浴衣に、薄藍と鶯茶の、たて縞お召の袷羽織が、しつとりと身だけに添つて、紐はつつましく結んであながら、撫肩を弱く辻つた藤色の裏に、上品な氣が見えて、緋色無地の背負上が媚かしい。おゝ、紫手絡の鬘だ。透通るやうな、その薄化粧。

金銀では買へないな。二十三か、あゝ、おいらは五になる。作者夥間の、しかも兄哥が、このしみつたれぢやあ、あの亭主に嘸ぞ肩身が狭からう、と三和土へ入ると、根岸の日蔭は、はや薄寒く、見通しの庭に薄が靡いて、秋の雲の白いのが、ちら／＼と、青く澄んだ空と一所に、お洲美さんの頸に映つた。

目の前まへにあるその姿すがたが、二階にかいへは来こないのです。

御厚意ごこういは何なんとも。しかし内弟子うちでしに住す込こませるとまでおつしやつて下くださいますと、一度いちど（何なんといはう

ー 女史ぢよし。女史ぢよしに御相談ごさうだんの上うへでありません

と如何いかゞでせうか。「おゝん」と咳せきして、「處ところ

がね、それが妙めうですよ、不思議ふしぎです。ー 妻さいが

ね、今朝けさです。ー < 今日けふは境さかひさんが見みえさうな氣きがする、といふのです。つひぞ、おいでになり

もせぬのに、そんなことが、といひますとね、手てを

お出だしなさい、手ての筋すぢを見てあげませう。あなた

今日けふの運命うんめいにも顯あらはれるから。ー 然さういふの

でね、手てを見みせました。妻さいに、あんなか

くし藝げいがあるとは知しりませんでしたよ。妻さいが豫知よちし

て、これが當あたつて、門生志願もんせいしきわんが秋田あきたの産さん、僕ぼくの赴任ふにん

が仙臺せんたいといふ、かう揃そろつたのに、何なんの故障こしやうがありま

すか。お庇かげでね、おゝん、お庇かげもをかし

いですが、手ての筋すぢで、妻さいと握合にぎりあひました。

境さかひさん、變へんな話はなしですが、お互たがひに、藝げい術家じゆつかは情熱じやうねつ

を以もつて生命せいめいとして活いきるのですな。妻さいもご同門どうもんでは

あり、藝げい術家じゆつかです、どんなに、その愛情あいじやうが灼熱しやくねつ的てきで

あらうか、と期待きたいしましたのに、何どうも

冷たい。如何にも冷やかですが、稟性の然らしむる處ですか。或は、あなた方、先生の教へは、藝に熱して、男女間は淡泊、その濃密膠着でなく、あつさりといふ方針でもおあんなさるか、一度内々で、と思つた折でもありますのでして。

失禮します。

居堪らなくて、座を立つ

と、――「散歩をしませう。上野へでも、秋の夕景色はまた格別ですよ。」此方はひけすぎの廊下鳶だ。――森の夕鴉などは性に合はない。

「あの、いま、さういはうと思つてゐた處です。

なんにもありませんが、晩のご飯を。」

まだ入れかへない葦戸に立つて、夫人がほの白く、寂しさうに薄暮合を、たゞ藤紫で染めてゐた。

その背の、奥八疊は、繪の具皿、筆おき、刷毛、毛氈の類で殆ど一杯。で、茶の間らしい、中の間の眞中に、卓子臺を据ゑて、いま、まだ焼海苔の皿ばかり。

三巴に並んだ座蒲固を見ると、私は玄關へ立ち切

れなかつた。

「すぐお爛がつきますが。境さん、さきへ冷酒で
すか。」

「いや、断ものです。」

と眞中へよれ／＼の袖口を、そつとのばして、坐
ると、どうも、其方が上席らしい、奥座敷の方へお
洲美さん。負けてはゐないな、妹よ、何だか胸が熱
くなる。紺の袴は、入口の茶棚傍を勢ひ然るやうに
及んで、着席です。

「牛が宜しい

書生流に、おゝん。」

亭主のすきな赤烏帽子を指揮する處へ、つくだ煮
を装分けた小皿に添へて、女中が銚子を運んで來た。

「よく、いすいだかい。」

「綺麗な銚子。」

色繪の萩の薄彩色、今寓里が露に濡れてゐる。

「妻の婚禮道具ですがね、里の父が飲酒家だから
ですか。僕は一滴もいけません、妻はのまず。」

おゝん、あの、朝顔以來、内でこれの出
たのは然うですなあ、大掃除の時、出入りの車夫に

「振舞うたばかりですよ。」

「お毒見をいたします。」

お洲美さんが白い手で猪口を取った。

「注いで下さい。」

大人驚いた顔をして、

「飲むのかね。」

「大掃除の時の車夫のお銚子ですから。――」

この方は、あの、雪助も同然の身持だけれど

先生の可愛い弟子です。」

かねて、切れた眦が吃として、

「間違ひがあると、私が、先生に申譯がありません

ん。」

「おゝん、何か、私の饒舌つた意味を取違へてゐ

るやうだけれど、いゝさ、珍らしく飲むのも可から

う 注ぐよ。」

「なみ／＼と。もう一つ。もつと、もう一度。」

歯ぎしりするやうに、きツきツと。

「あゝ、飲んだ。」と、もう白澄んだ臉を染め

た。

「境さん、いゝでせう、上げますわ。」

「駕籠屋は建場を急いでゐます、早く飲まうと思

つてね。」

「おいらんのやうにはいきません。お酌は不束ですよ、許して下さい。」

「此方も驅けつけ三杯と、ごめんを被れ。雲雪足早き雨空の、おもひがけない、ご馳走ですな。」
と、夫人と見合つた目を庭へ外らす。

大人の頤が上つて、

「大分壮になりましたな、おゝん。」

「あなた、電燈を捻つて下さい。」

牛肉もふつ／＼煮えて来た。

といふうちにも、何ういふものか、皿に擴げた、

一側ならべの肉が、鍋へ入ると、じわ／＼と鳴ると

齊しく、箸とともに眞中でぢゆうと消え失せる。注

すあと、注すあと、割醬油はもう空で、葱がじり／

＼焦げつくのに、白瀧は水氣を去らず、生豆腐が堤

防を築き、渠なつて湯至るの觀がある。

「これぢや、牛鍋の湯豆腐ですね。」

ふうと、お洲美さんの鼻のつまつた時は、お銚子
がやがて四五本目で、それ湯を、それ焦げる、それ

湯を、さあ湯だ、と指揮と働きを亭主が一所で、鐵
瓶が空のあとで、水指が空になり、湯沸が俯向けに
なつて、なほ足らず大人、居丈高に伸び上つて、臺
所に向ひ、手を敲いて、これよ、水ぢや、水ぢや。
」

が、妹分いもつぶん のために、苦くにせまい。肉にくの薄うすいのは身代しんじよの瘦やせたのではない。大人たいじんは評判ひやうばんの蓄財家ちくざいかで、勤儉きんけんの徳とくは、範はんを近代きんだいに垂たるゝといつても可いいのですから。

その證據しよつこには、水騒みづさわぎの最中さいちゆうへ、某雜誌記者ぼうざつしきしや、氣き忙はしさうで口早くちばやな瘦やせた男おとこの訪問ほうもんがあり、玄關げんくわんで押おし問答もんたふの上いっへ、二階にかいへ連れて上あがつたのは挿畫さしゑな何枚なんまいかの居催あそびそく促たいじん、大人たいじんに取とつては、地位ちゐてんくわん轉換めんもく、面目めんもく一新いっしんといふ、某省ぼうしやうの辭令じれいをうけて、區々くゝたる挿畫さしゑごと如かへりきは顧かへりみなかつたため債さいが迫せまつた。顧かへりみないにした處ところで、受合うけあつた義理ぎりは義理ぎりで、退引のつびきならず二階にかいで、膝詰ひざつめの揮毫きがうとなる處ところへ、かさねて、某新聞ぼうしんぶんの記者きしや、此方こちらは月曜附録げつえつぷろくとかいふ歌うたの選せんの督促とくそくで一足後ひとあしおくれたが、おくれただけ、なほ怒おこつたやうに、階子段はしこだんを、洋袴ずぼんの割股わりまたで押上おしあがつた。この肥ふとつたので、二階にかいへ蓋ふたをしたやうに見みえました。

「流行はやるんだなあ。」

編輯、受附、出版屋、相ともに持込むばかりで、催促どころか、めつたに訪問などされた事のない、兄弟子は、夜風を構外類へ、げつそりと腹を空かして、

「結構ですな。」

枯野へ霜がおりたやうな、豆腐の土手の冷たいのに、押取つて、箸を向けると、

「およしなさい。」

と酔とともに、ふら／＼とかぶりを振つて、

「牛鍋の湯豆腐なんか、私の御馳走ではないのですから。あなたのお頼みなさいました、

そのお弟子さんですがね、内へおいでなさるんなら、この覺悟、ね、より以上かもしれませんから。お葱や、豆腐はまだしも、
下さいましね。お腹が冷たくなるんですから
絲薺だと思つて

お酒はあります。あ、私にも飲まして頂戴もう一杯もつとさ。」

「いや驚いた、いけますなあ。」

「一生に一度ですもの。」

「え。」

「いゝえ、二度です、婚禮の晩、飲みましたの。」

酔ひましたわ。」

「亂暴だなあ。しかし、痛快だ。お酌をするのも頂くのも、ともに光榮です。」

「お兄上。」

「」

「おぼ、ほ。あゝ酔つた。私 お兄上にあたる方にお酌がさして罰が當る。前、あなた

が、まだ、先生のお玄關にいらつしやる時分、私が時々うかゞふ毎に、駒下駄を直さして、あゝ、勿體ない、然う思ふ、思ふ心は、口へは出ず、手も足も固くなるから、突張つて、ツン／＼して、嘸ぞ高慢に見えたでせう。髪の毛一筋抜けたつて、女は生命にかゝはります。置きどころもない身體を、あなたの目に曝すんですもの、形も態もありはしません。文學少女とかいふものだつて、鬼神に横道なしですよ。自分で卑下する心から、氣がひがんで、あなたの顔が憎らしかつた。あなたも私が憎いのね。

「——あゝ、信や（女中）二階で手が鳴る。——

蟲が煩い。この燈を橋して、隣室のを點けておくれな。」

その間、頸脚が白かった。振仰向くと、吻と息して、肩が揺れた、片手づきに膝をくねつて、

「あゝ、酔つて来た、境さん、おいらんとは。お陸じい？」

と、バタリと畳へ手をつくると、浴衣の蔦は野分する。

「何をいつてるんです。」

「おいらんは何て方？」

十六夜さん、三

千歳さん？」

「薄雲、高尾でございます。これでも其處らで、鮎を撮んで、笹巻の笹だけ袂へ入れて振込めば、立ちどころに仙臺様。」

庭の薄に風が當る。

「寂しいな、お洲美さん、急に何だか寂しい氣がする、仙臺へ行つてしまはれては。」

「ですけどね、あの、ほかの世話はかまひませんが、媒妁だけは、もう止してね。」

と、眉が迫つて見据ゑるのです。

「媒妁？」

「名はいひますまい、賣ツ子ですよ。私

たちのお弟子なかまではありません。別派、學校側の花形で、あなたのお友だちの方に――わかりまして私を、私をよ、嫁に、妻に世話しようとなすつたのは誰方でした。」

「そ、それは、しかし、勿論、となすつたのは誰方でした。」《一何だ。別派、學校の可。

その男が、私を通じて、先生まで申出てくれと頼まれたものだから――

「お料理屋へ私をお呼び下すつてが、そのお話を遊ばしたんです。――境が橋わたしの口を、口を利いた、と一言一言おつしやるのを聞いた時、私、私――

「お待ちなさい、待ちたまへ。――だから断つたから差支へないでせう。」

「え、断りましたわ、誰があんな――あんな男に世話しようなんのつて、私、あなたが、私あなた。」

「そりや無理だ、そりや無理だ、お洲美さん、あなたが、あの男を好きだか、嫌ひだか、私がそれを知るもんですか。」

「だつて、だつて、些とでも、私を、私を思つて下すつたら、怪我にもあんな、あんな奴に。」

「無理だ、そりや亂暴だ。」

「えゝ、無理です、亂暴です。だから、私、すぐそのあとで、それまで人をかへ、手をかへ、話があるのを斷つてゐた。―― よござんすか。―― 私も、あなたが大嫌ひな、一番嫌ひな、何より好かない、此家へ縁付いて了つたんです。ほ、ほ、ほ。」

#####

太白の絲を噛んだやうに、白く笑つて、

「亂暴でせう。亂暴、亂暴だけど、あの一番嫌ひな人を世話しようとした、その口惜さに、世話しようとした人の、あなたですよ、あなたの一番嫌ひな男の許へ縁についた。無理です、亂暴です。亂暴ですけど、あなたは、あなただつて、そのくらゐな著作をなさるぢやありませんか。」

「何にもいはない。―― もう、朝顔の、ま、枕が時から、一言もないのです。私は坊主にでもなりたい。」

お洲美さんは、**■**つてみた目を閉ぢました。そして、うなづくやうに俯向いた耳許が石榴の花のやうに見えた。

「私は巡禮

もうこの間から、とりあへず仙臺まででも、奥州を巡禮してゆきたい氣がするんです。まつたくですわ。さういつたら、内の女中ツたら、ねえ、あの、私のやうな汚がり屋さんが、はゞかりを何うするつて笑ふんですの。巡禮といへば、いづれ木賃宿でせう、野宿にしたつて、それは困るわね。でも、眞面目ですよ、ご覧なさい。――昨日も上野の淨明院石占守の萬體地藏様に、お参りをして、五百體、六百體と、半日、日の暮方まで巡りましたらね、(水木藻蝶。いゝ名でせう、踊のお師匠さんに違ひないのです。(行年二十七)として、名を刻んだ地藏様が一體、菅笠を――あゝ、暑い、私何だか目が霞む。――菅笠を。めしてしいらつしやるんなら、雨なり、露なり、取るのは遠慮だつたんですけど、背中に掛けておいでなすつたもんだから、外して、本堂へ持つて行つて、お布施をし

て、坊さんに授けて貰つて來たんです。――こ
れだつて女です、巡禮しても、些とでも、形のいゝ
やうに、お師匠さんのを――あの、境さん、菅
笠を抱きました時に、何となく、今日ね、あなたが
いらつしやる氣がしたんですよ――そ、それに
二十七だとすると、もう五年生きられますもの。

――押入なんかに藏つておくより、晝間は一寸
秋草に預けて、花野をあるく姿を見ようと思ひます
とね、萩も薄も寝てしまふ、紫苑は弱し。

さつき、あなたのおいでなすつた時ですよ、丁ど
鶏頭の上へ乗つけて見ましたの。さうすると、それ
がいゝ工合に。――

あゝ、然うか、鶏頭か。春日燈籠をつゝんで、薄
の穂が白く燈に映る。その奥の暗い葉蔭に、何やら
笠を被つた黒いものが立つて居て、ひよろ／＼と動
くのが、ふと目に着いてから氣にかゝつた。が、決
意もなく、斷行もない、坊主になりたいを口にする
とともに、何うやら、破衣のその袖が、ふら／＼と
誘ひに來さうで不氣味だつた。

「見せますわ、見せませうね。巡禮を。」

「大賛成です。」

「水木藻蝶さん、うつくしい人の面影ですよ。」

何處で脱いだか、はツと忽ち、うす鼠地に蔦を染めた、女作家の、庭の臍の立姿は、羽織を捨てて、鶏頭の竹に添つて居た。

軽くはづして、今、手提に引返す。帯が、もう弛んで居る。さみしい好みの水淺葱の縮緬に、蘆の葉をあしらつて、淡黄の肉色に影を見せ、螢の首筋を、ちら／＼と紅く染めた蹴出しの色が、雨をさそふか、葉裏を冷く、颯と通る處女風に、蘆も螢も薄くすゝきゝに映つて、露ながら白い素足。二階の裏窓から漏れる電燈に、片頬を片袖ぐるみ笠を黒髪に翳して、隠すやうにしたが、蓮葉に沓脱をひらりと、縁へ。

「ふら／＼する。一寸歩行くと、ふら／＼しますわ。酔つ了つて。」

と、元の座にくづれた。

「あゝ私、何だか分らない。」

ふう、と仰向けに胸の息づかひ、乳の蔦がくれの
膨みを、犇と菅笠で壓へながら、

「巡禮に御報謝
と、切なさうに微笑んだ。」

電燈を背後にして、襟のうすぐらい、胸のその菅
笠が、ほんのりと、朧に白い。

「や、お洲美さん、失禮ですが、隠して下さい、
笠を透して胸が白い、乳が映る。」

「見えますか。」
「申すも愕りだが、袖で隠して。」

「いゝえ、いゝえ。」
おくれ毛が邪慳に揺れると、頬が痩せるやうに見
えながら、

「嬉しい、胸が見えるんです。さ、遮るものなし
に通つた、心の記念に、見える胸を、笠を通して捺
塗つて見て下さい。その幻の消えないうちに。色が
白いか何ぞのやうに、胡粉とはいひませんから、墨
でも、澁でも。」

「雪が一掴みあればいゝと思ふ。」

「信や 繪の具皿を引攪つておいで。」
「穩かでない、穩かでない、攪ふは亂暴だ、私が借りる。」

胡粉に筆洗を注いだのですが。

「畫工でないのが口惜いな。」

「何ですか蘭竹なんぞ。あなたの目は徹りました、女の乳といふものだけでも、これから、屹と立派な文章にかけられます。」

「――以來、乳とかく時は一字だけでも胡粉がいゝ！と咄嗟に思つて、手首に重く、脈にこたへて、筆で染めると、解けた胡粉は、ほんのりと、笠よりも掌に響き、雪を圓く、暖かく、肌理滑らかに装上げる。色の白さが夜の陽炎。」

「あゝ、あゝ、刺青ツて、こんなでせうか。」
「居ずまひの亂るゝ膚に、紅の點滴は、血でない、螢の首でした。が、筆は我ながら刀より鋭く、双の乳房を、驚破切落したやうに、立ててみた片膝なり、思はず、ニと尻もちを支いた。」

お洲美さんは、うつとり目を開き、膝を這つて、蹴出しを隠した菅笠に、兩の白いものを視て、擦つたさうに、そツと撫でて、

「熱いわーこの乳も酔つてゐる

と、いつて寂しく微笑んだ。

「人目があります。これでは巡禮して、肌を曝しては、あるかれませんね。ぼつちり薄紅を引きませうか、まあ、それだと、乳首に見えようも知れませんか。」

浅葱の繪の具を取つて、線を入れた。白雪の乳房に青い静脈は畝らないで、うすく輪取つて、双の大輪の朝顔が、面影を、ばつと咲いた。

蔓を引いて、葉を添へた。

「うまいなあ、大野木夫人。」

「知らない。ーこのくらゐな繪は學校で習ひます。同行二人ーあとは、あなた書いて下さいな。」

「御意のまゝです、畏まつた。」

「薄墨だし 字は餘りうまくないのね。」

「弘法様ぢやあるまいし、巡禮の笠に、名筆が要りますか。」

「頂くわ、頂きますわ。」

と、被らうとする。

「お、お待ち下さい。――二階が餘り静です。

氣障をいふやうだが その上になほ、お鬢が亂れる。」

「可厭な、そんな事は、おいらんに。」

「あゝ、坊主になります。」

首を縮めた。

「丁どいゝ、坊主が被つて見せませう。」

唯、魔がさしたやうに、否、佛が導くやうに、笠を被ると、笠の下で、笠を被つた、笠の男が、笠を被つて、ひとりでに、ぶら／＼と歩行き出したのです。

中の室から、玄闌へ、式臺へ、土間へ、格子へ。

八ツと思はず氣が着いたが、

「お洲美さん、貰つて行きます。」

我知らず聲が出ました。

「あれ、奥様。」

女中が飛出す。

お洲美さんは、式臺に一段躓きながら、褌を投げて、障子の棧に縋つたのでした。

ぶつ／＼と、我とも分かず、口の裡で、何とも知らず、覺えただけの經文を呟き呟き、鶯谷から、上野の山中を彷徨つて歩行いた果が、夜ふけに、清水の舞臺に上つた。而して、朱の扉の端に片よせて、紅緒をわがね、なし得る布施を包んだ手帖の引きほぐしに、

大慈のおん心にまかせ三界迷離の笠一書
よしなにおん計 ひのほど奉願上候

夜巡禮者

當御堂 お執事中

禮拜

舞臺を下りると、いつか緒の解けたのが、血のやうに絡はつて、生首を切つて來たやうに見えます。

秋雨あきさめがざつと降ふつて来る。

震ふるへ、震ふるへ、

段だんを戻もどつて、もう一度いちど巻まき込んで、それから、ひた走はしりに、駆かけ出だしましたが。

お洲す夫みさんは――水木みづき藻も蝶ての年としも待またず、三ね年んめに、産さん後ごで儂はかなくなりました。

「その紅べに緒をなんです。其その朝あさ顔がほの笠かさ、其その面おも影かげなんです。！」

「――お絹さん、宿へ行つて話しませう。――
此の笠に、深いわけがあるんですから。」

「そしたら、泊つておくれやすえ、可恐いよつ

て。

「大きに。」

お洲美さんの思出のために、目の前の誘惑に對する餘裕が出来て、と、軽く受けて、我ながら一寸男振を上げながら、夜露も身に沁む、袖で笠を抱きました。

「旦那、歸つてもいゝんでござんせう。」

藍川館の玄關へ引込んだ時、酔つた車夫がニヤノと聲を掛けた。

「ほんに。」

「いや、一臺は、そのまゝ。幌は掛けたまゝ頼む

よ。」

笠を預けて出たんです。が、今おもつても、冷汗が流れます。此の俵をかへしてゐたら、何の面目が

あつて、世にお目に掛かられよう。

見て下さい。――曲りくねつた長い廊下を、さうでせう、すぐ外は線路だといふ、奥の奥座敷へ通つて、殆ど秘密室とも思はれる。中は廣いの、たゞ狭い一枚襖を開けると、何うです。歡喜天の厨子かと思ふ、綾錦を積んだ堆い夜具に、ふつくりと埋まつて、暖かさに乗出して、仰向けに寝て居たのが、

「やあ。」

といふ。

枕が二つ。

「これはおいでなさい。」

眉の青い路之肋か、八反の廣袖に、桃色の伊達巻で、むくりと起きて出たんですから。

「遅いので、何のおもてなしも。さ、さ、

蜜柑でも。」

片寄せた長火鉢の横で、蜜柑の皮筋を除る、懐紙の薄いのが、しかし、蜘蛛の巣のやうに見えた。

「――さうですか、いづれ明日。――お供を

「いや、待たせてあります。」

路之助は、式臺に、色白くその伊達巻で立つた。

お絹が廂を出て、俵の輪に摺り寄つた處を、

「握手をしますよ。」

半身を幌から覗くいと、

「は、は、は、何うぞ確乎。」

「さやうなら。」

「お静かに。」

「あゝ、お洲美さん。」

萬一、前刻に御堂の縁で、脣を寄せたらば、恥辱に生きてはゐられまい。――

「お洲美さん、全く、お庇だ。お洲美さん。」

「旦那、何うか、なさいま七たか、旦那。」

「うむ。」

踏切の坂を引あげて、寛永寺横手の暗夜に、石燈籠に圍まれつゝ、轍が落葉に軋んだ時、車夫が振向いた。

「婦の友だちだよ。」

「旦那。」

車夫は、藍川館まで附絡つた、美しいのに遁げられた、色情狂だと思つたらう。

「うつくしい、儂い人だよ。私の傍に居るやうだ。」

「ぎやあ。」

「次手におろしておくれ、山の中を巡禮がしたくなつた。」

「降り出しましたぜ、旦那。」

「野宿をするのに、雨なんぞ。あなたは濡

らさない、お洲美さん。」

「わあ、大きな燈籠の中に青い顔が、ぎやあ。」
俵を棄てた。

術を似て對すれば、俳優何するものぞ。たゞしその頃は、私に臺本、戯曲を綴る氣があつた。ふと、演出にあたつて、劇中の立女形に扮するものを、路之助として、技の意見、相背き、相衝いて反する時、「ふん、おれの情婦ともしらないで。何、

人情がわかるものか。」と侮蔑されたら何とする？

「あゝ、お洲美さん、ありがたう。」
と朝顔の笠を兩袖で、外套は宿へ忘れて來
た。――袖で犇と抱いて、櫻を誘ふ雨ながら、ざ
つと一しきり降り來る中に、怪しき巨人に襲はるゝ、
森の恐怖にふるへつゝも、さめ／＼と涙を流した、
石燈籠が泣くやうに。

【完】